

英語で「やりとり」する力を育てる指導の工夫

学習開発分野(16220913) 深瀬 智子

次期学習指導要領では、目指す資質・能力の柱の1つとして「学びに向かう力・人間性等」を挙げている。また英語では、「話すこと」が「やりとり」と「発表」という2つの領域に分けられる。英語の授業を通して、言葉を通じて他者と関わる力をはぐくむために、2つの領域を意識して指導する必要がある。本研究では「やりとり」する力を育てる指導の工夫を考察する。

[キーワード] 話すこと、「やりとり」、方略的能力、他者との関わり

1 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

これまでの自身の授業を振り返ると、英作文や発表の場面において、生徒が自己表現できるように工夫してきたが、表現活動そのものが文法事項を習得するための型通りの活動となってしまう、活動を通して生徒同士が情報のやりとりを行うことが難しかった。つまり学習課題に取り組むこと自体が目的となってしまう、心と心の交流をする、真のやりとりには至らなかった。そのため、生徒はコミュニケーションの本当の楽しさを味わうことができず、言いたいことを一方的に伝えるのみで、相手の反応に無頓着のまま会話が終わってしまう場面が見受けられた。会話のおもしろさとは本来、言葉のやりとりを通し、相手と心を通わせたり、新たな発見をしたりする点にあるはずだが、双方向のやりとりに至らずに終わってしまう生徒が多い。

(2) 研究の背景

次期学習指導要領において、育成を目指す資質・能力として、「①何を理解しているか、何ができるか(生きて働く『知識・技能』の習得)」「②理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」「③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」を挙げている。授業においては、多様性を尊重し互いのよさを生かして協働する力をはぐくむことを意識した授業づくりを行う必要がある。

英語の4技能のうち、他者と関わる上で特に重要な技能は「話すこと」と「聞くこと」と考えら

れる。次期学習指導要領では外国語教育に関して、「話すこと」を「話すこと(やりとり:interaction)」(以下:「やりとり」と「話すこと(発表:production)」(以下:「発表」という2つの領域に分け、より具体化した目標を立て指導にあたるよう示している。その背景として、従来の中・高等学校で行われている言語活動が文法・語彙等に重点が置かれ、「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分に行われていないことが指摘されている。そこで、これまでの「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能から、単に知識・技能だけでなく、それらを活用して思考したり表現したりする言語活動を示すために、CEFR(=外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)を参考に、従来の「話すこと」を「やりとり」と「発表」とに分けた5つの領域として目標を示すことにした。

CEFRにおける言語活動の定義を確認する。吉島、ほか(2008)によれば言語活動は「受容的言語活動:reception」「産出(表出)的言語活動:production」「(言葉の)やり取り:interaction」「翻訳・通訳などの仲介活動:mediation」の4つに分けられ、やり取りは受容的言語活動と産出(表出)的言語活動を基本として交互に、時に同時に行われるものとしている。

(3) 研究の目的

英語の授業では、他教科と比べ自己開示の場面が多く、自己理解や他者理解の深まりが期待される。学びに向かう力・人間性をはぐくむため、他者と関わる上で重要な技能である「話すこと」に着目した。「やりとり」と「発表」という2つの領域に分け、意識して指導に当たることにより、真

の「やりとり」につながるコミュニケーション能力をはぐくむことができるのではないかと考える。

昨年度の研究では「発表」に焦点を当て、タスクの工夫を行うことで生徒の学習意欲を喚起し、自発的に学べるような言語活動の工夫を行った。その実践を受け今年度は「やりとり」に焦点を当て、方略的能力を高めるという観点や相手を意識したコミュニケーションという観点から授業改善を図ることで、他者と関わる力を高めていきたい。

2 先行研究

(1) コミュニケーション能力

次期学習指導要領における中学校外国語の目標は、学習活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育てることである。

それでは、コミュニケーション能力とは一体どのようなものなのだろう。サンドラ・サヴィニョン(2009)は、コミュニケーションにおける能力を5つ挙げている。その一部を抜粋する。

1. コミュニケーション能力は静的な概念ではなく、動的なものであり、ある程度同じシンボルのシステムを共有する複数の人たちの間で行われる意味の交渉によって決まる。この意味でコミュニケーション能力は個人のものというよりは、対人関係に基づくという特徴を持つ。

(中略)

5. コミュニケーション能力は絶対的なものでなく相対的なものであり、参加者すべての協力によって成立する。ということはコミュニケーション能力のレベルというものも考える必要もある。

このことからコミュニケーションとは、相手との関わりの中で、その時々状況に合わせながら、相手の立場も意識し交流することであると考えられる。英語の学習活動を通して、言語運用能力を高めていくことが求められている。

(2) 話すこと

佐々木(2011)はバイゲイトのスピーキング技能の概要図において、知識と技能の矢印が双方向性を持っていることから、スピーキングは知識のみで行うものではないことや、行う過程の中で知識を増やしていくことだと解釈している(図1)。

また、スピーキングのプロセスとして計画、選択、産出があることに注目し「限られた時間の制約の中で、すべてを行うわけであるから、言語知識に基づいた正確さだけに気をとられていても、

スピーキングという言語産出は成立しないとバイゲイトは説明している。」としている。

このことから「話すこと」を「書くこと」と比較した場合、時間的制約や相手の反応によって展開が変わるという点においての難しさがあり、瞬時に何をどう伝えるかを判断しなければならないという点において、即興性、双方向性が求められる。それらの力を授業で高めていく必要がある。

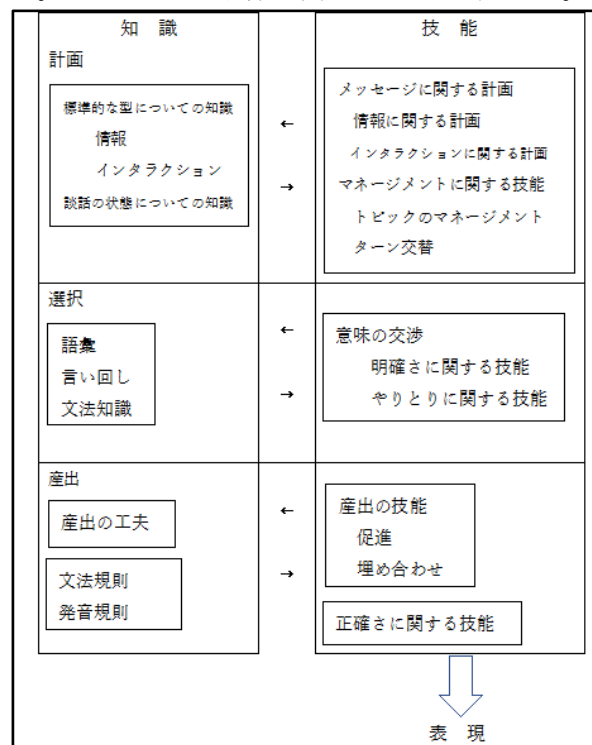


図1. バイゲイト(1987)によるスピーキング技能の概要(佐々木 2011: 149)

(3) 方略的能力

サヴィニョン(1983)は、コミュニケーション能力の4つの構成要素、文法的能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力は、学習段階が進むにつれて、その割合が変化するものとして、「逆ピラミッド」の形で表した。それを受け松川・大城(2008)は、これまでの日本の英語教育で最も不足していたのは、方略的能力(語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力)ではないかと指摘し、日本の外国語教育にあてはめて改造した図を示した(図2)。語彙力や文法的な学習が十分でない小学校段階や中学校段階だからこそ、方略的能力を駆使してコミュニケーションを図る重要性を示している。このことから中学校において、方略的な能力を高めるための指導を取り入れることが重要であることがわかる。

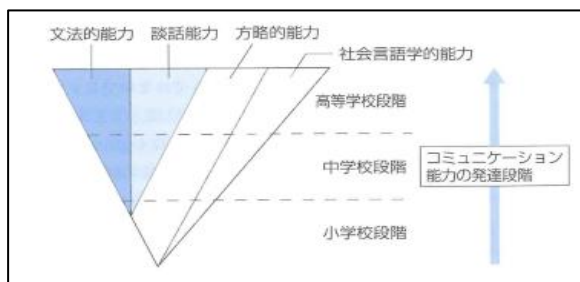


図2. 松川・大城(2008)によるコミュニケーション能力の構成要素(松川・大城2008: 48)

3 実践と結果

(1) 山形県内A中学校とB中学校の実態把握

今年度実践を行う2つの中学校を対象に、英語学習に関する意識調査を行った。対象生徒は、A中学校の2年生112名と、B中学校の3年生153名である。時期はA中学校が2017年4月、B中学校が同年6月である。調査結果の一部を以下に示す。

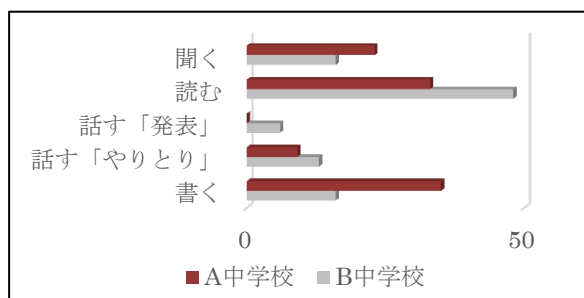


図3. 生徒が得意だと感じている領域

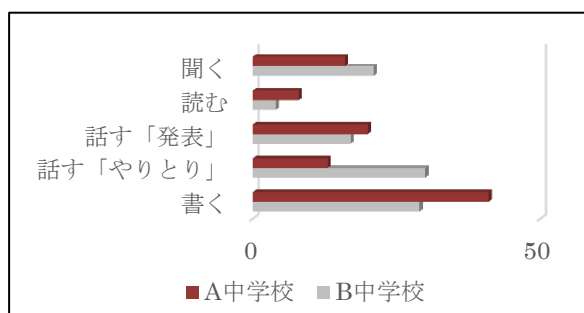


図4. 生徒が伸ばしたいと感じている領域

A中学校では、「得意なこと」として「書くこと」が35%に対し、「話すこと(発表)」は0%、「話すこと(やりとり)」は9%であった(図3)。また「伸ばしたいこと」は、「話すこと(発表)」が20%、「話すこと(やりとり)」が13%であり、いずれも「書くこと」41%の半数以下にとどまった(図4)。

「話すこと」への苦手意識の背景には表現活動に不慣れであることや、学ぶ動機付けにあると考えられる。前年度の印象的な活動として、ビンゴや単語テストを挙げる生徒が多く、語彙習得に重点を置いた授業形態だったことが伺える。また「達成感を味わう瞬間」として、約9割の生徒が「テストの点数が上がったとき」としているのに対し、「考えを表現できたとき」や「聞いて理解できたとき」がそれぞれ約4割だったことから、英語を使ってコミュニケーションを取ることに楽しさには至っていないと考えられる(図5)。

B中学校では、「得意なこと」として「読むこと」が48%と最も多く、「話すこと(発表)」は6%、「話すこと(やりとり)」は13%であった(図3)。また「伸ばしたいこと」は、「話すこと(やりとり)」が30%と最も多く、「話すこと(発表)」も17%と、「話すこと」への意識が非常に高いものであった(図4)。

また「達成感を味わう瞬間」として、「自分の考えを表現できたとき」が70%、「英語を聞いて理解できたとき」が59%であり、A中学校と比較するとそれぞれ約1.5倍の値を示している(図5)。人の考えを聞く活動や自分の考えを伝える活動に意欲的に取り組んでおり、ためらわずに表現できる生徒が多い。

この結果を踏まえ、それぞれの学校での指導を工夫し、「やりとり」する力を育てることを目指す。

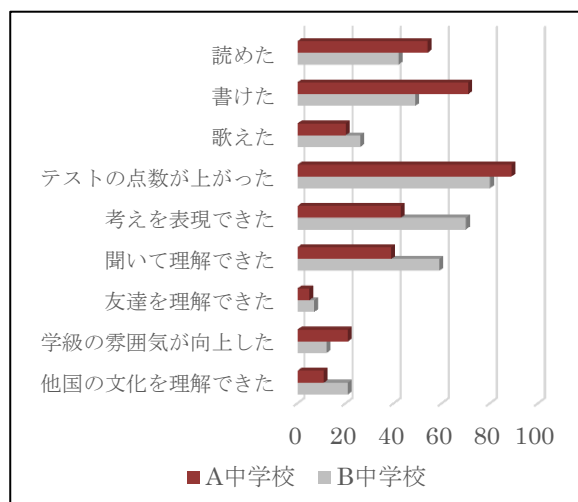


図5. 生徒が授業で達成感を味わう瞬間
(※複数回答可)

(2) A中学校における実践

A中学校では、表現活動に不慣れで「話すこと」

を苦手と考える生徒が多く、英語を学ぶ動機が外的要因によるものが大きいことが、先の意識調査からわかった。そのため「やりとり」する場を設定し継続的な実践をすること、また生徒の実態を詳しく把握することから始めた。

①帯活動の利用

授業開始後の5分程度で、学習プリントを利用したペアによるQ&Aを継続して行った(図6)。

すばやく答えよう! name()		
	質問する人	答える人
1	Do you like "sushi"?	Yes, I do. / No, I don't.
2	Did you go shopping yesterday?	Yes, I did. / No, I didn't.
3	What food do you like?	I like ().
4	Where do you live?	I live in () in Tendo.
5	Who is your favorite singer?	He /She /They is / are ().
6	オリジナルの質問 () ?	

図6. 帯活動で使った学習プリント

質問する生徒は、できるだけすばやく質問すること、答える生徒は、自分自身のことを答えることを求めた。あらかじめ答えを想定することができ、安心して活動に取り組むことができた。その後、図6の疑問文の一部を自由に変えさせ、即興に近い形を目指したところ、答える生徒は、何とか自分の答えを返すことができた。しかし一方で課題点も見えた。それはすばやく応答することに意識が向き、相手の声が小さくうまく聞き取れない時にも、すぐに次の質問に移ってしまう生徒がいたことである。学習活動そのものがパターン化してしまい仮のコミュニケーション活動になってしまったことや、生徒同士の人間関係の希薄さが明るみに出た。

そこで「相手が答えたことに対しリアクションを返そう」と促し、黒板に「Me, too.」「Really?」などの表現を提示したところ、積極的に使おうとする場面や、今までは無反応だった生徒が相手の話したことを理解できない際に首をかしげ意思を表示する場面が見られた。

②スピーキングテストの実施

1人1人の話す力の実態を探るため、A中学校の2年生(108名)を対象に、ALTと生徒1対1でスピーキングテストを実施した。実施時期は2017年7月で、評価基準と項目は表1の通りである。

表1. スピーキングテストの評価基準

【知識・技能を求めて】	
項目1: 自分の夢について話することができる。	
項目2: 自分の夢についての理由を話することができる (あらかじめ準備している内容)	
3点	正しい英文で話することができる。
2点	一部不正確だが、英文で話することができる。
1点	単語のみで話することができる。
0点	話すことができない。

【思考力・判断力・表現力を求めて】	
項目3: 教師の質問に対して即興的に答えることができる。 (質問内容は事前にわからない。)	
3点	ふさわしい英文で答えることができる。
2点	ふさわしい答えを Yes / No や単語で答えることができる。
1点	文脈には合っていないが、Yes / No など何らかの反応を返すことができる。
0点	答えることができない。

【学びに向かう力・人間性を求めて】	
項目4: 会話の流れに応じて、生徒が主体的に教師に質問をすることができる。	
3点	会話の流れに応じて積極的に質問をすることができる。
2点	会話の流れを捉えながら、知っている表現を使って何とか質問をすることができる。
1点	尋ねる意思が感じられる。
0点	何も質問をすることができない。

各項目に対する評価結果の学年平均は以下の通りである(表2)。いずれも3点満点である。

表2. スピーキングテストの評価結果

項目1:	平均	2.92	(達成率	97.3%)
項目2:	平均	2.84	(達成率	94.6%)
項目3:	平均	2.02	(達成率	67.3%)
項目4:	平均	1.70	(達成率	56.6%)

テストでは、「What do you want to be in the future?」と尋ねられること(表1の項目1)、またその理由を尋ねられること(表1の項目2)を事前に予告していた。それらの得点が高いことから、練習を重ねテストに臨み、基本的な知識を得られたことが伺える(表2)。その一方で、ALTと1対1で話すテストは初めてだったため、突然の

質問（表1の項目3）には戸惑うことが多く、助けを求める表情や、無言のまま立ち尽くす姿が見受けられた（表2、図7）。その場で思考し表現する力が弱いと言える。

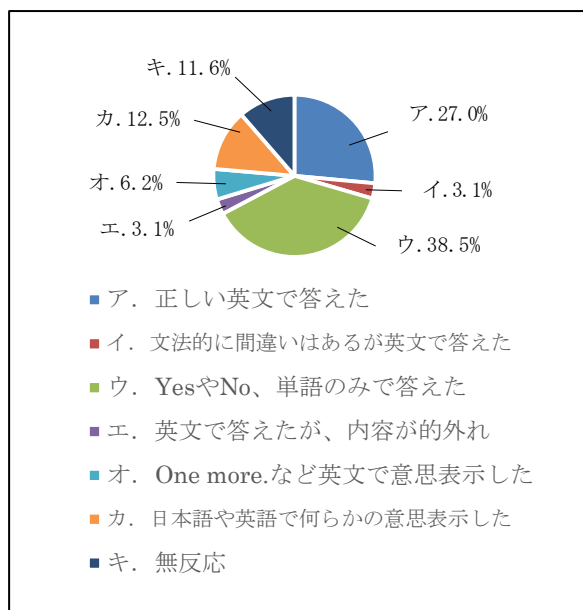


図7. スピーキングテスト時の表1の項目3に対する生徒の反応

注目すべきは「無反応」が約1割も存在したことである。相手から質問されているにも関わらず何も反応を示さないことは、コミュニケーションの問題であると痛感した。テスト後の振り返りにおいて、「無反応群」の生徒に理由を尋ねたところ、質問の意味がわからずに頭が真っ白になってしまったことや、質問の意図を理解し返答内容も浮かんでいないが、英文で表現することができなかったことなどが挙げられた。授業における会話練習で聞き返す表現を練習したものの、実際に使える段階には至っていないことが伺えた。また相づちも同様に授業内では使えるが、テストでは極端に使用頻度が少なかった。

図8、9はテスト終了後のアンケートで、いずれも自由記述の回答を、分類化したものである。図8を見ると、最も多い回答は「話をはずませたい、関連した質問をしたい」で約4割であった。「会話を楽しみたい」という願いが記述から読み取れた。また約2割の生徒が「表情や相づちなど方略的能力を伸ばしたい」と回答している。ALTと個別に会話をしたことで、わからない時に言葉やジェスチャーなどを駆使して伝える大切さや、会話をする時は表情も大事であることに、気付く

ことができた。自由記述欄にこれらの記述があったことから、生徒自らが「Q→A→Q→A」をすることで会話の内容を広げられることに気付き、また、方略的能力を高めていく必要性を感じることもできた、と言えよう。

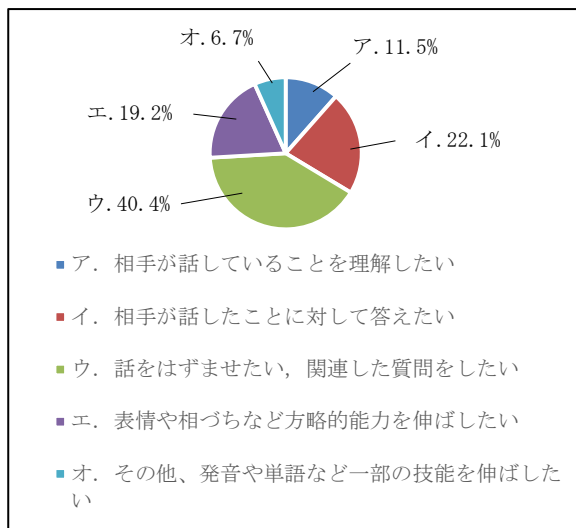


図8. 生徒の次回のスピーキングテストの目標

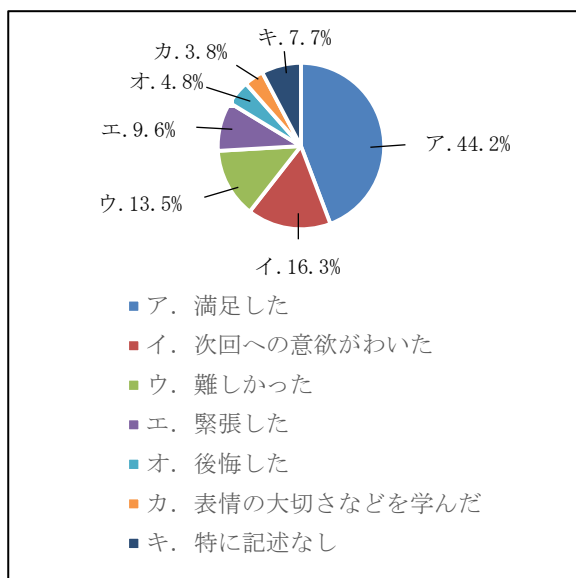


図9. スピーキングテストを受けた生徒の感想

テストで苦戦していた生徒でも、「ALTと1対1で話せて楽しかった。」というように英語を使う楽しさを実感し、「満足した」と回答する生徒が多かった。また「いくらペーパーテストで高い点数を取っても、話せなくては意味がないのでもっとしっかりと話したい。」というように「話すこと」への意識が高まり、「次回への意欲がわいた」生徒も多かった（図9）。このことから、「話すこと」自体を苦手とする生徒にも、機会を与えることで気

付きや学びが広がっていくことがわかった。

③スピーキングテストの結果を受けて学ぶ

テスト終了後、「コミュニケーションの力を今よりも少し高めるために必要なことを考えよう！」という授業を実施した。方法は、テストで多く見られた「やりとり」を4つのパターン（「質問に答えられず無反応の生徒」「質問を理解できないが、首をかしげるなどの反応をする生徒」「相手に理解してもらえない時に、別の言葉で言い換えて説明する生徒」「完璧な英文ではないが何とか伝えようとしていて会話を楽しんでいる生徒」）に分け、授業者とALTがモデルとして示した。その後、問いを与え考えさせた(表3)。

表3. モデル提示後に生徒に問いかけた質問

問 1. 「コミュニケーションをとる上で、なぜ『沈黙』はダメなのだろう？」
問 2. 「英語を話すレベルはパターン 1 の時と差がありませんでしたが、パターン 2 の方が『コミュニケーション上手』だったのはなぜだろう？」
問 3. 「英語の上手さ以外に『コミュニケーションに必要な力』は何だろう？」
問 4. 「パターン 4 が、最も『コミュニケーション上手』だったのはなぜだろう？」

生徒は、問1では「無視されているような気がするから。」「答えないと質問の意味がわかっているのか、わかっていないのか不安になるから。」、問2では「わからないという事実をきちんと伝えていたから。」、問3では「身振り、手振りを使って相手の質問に答えようとする力」「自分のことをわかってほしいという気持ち」、問4では「感想を述べたり、話を広げたりして会話が盛り上がっていたから。」と回答している。

実際の使用場面においては発音の正しさなどに加え、方略的能力や相手に伝えようとする意志も合わせて重要であることを、モデルの提示により気付かせることができた。

(3) 教職専門実習Ⅲにおける実践

意識調査から、B 中学校の生徒は自分の考えを表現できたときに達成感を味わう生徒が多く、また「話すこと」が得意で、伸ばしたいと考える生徒が多い(図3, 4, 5)。その背景には、これまでの積み上げが伺える。生徒のスピーキングのレベルは非常に高く、ディベートの基本的なスキルである自分の考えを持つことや、それを相手に伝

えようとする、相手の考えに耳を傾け、その主張が終わるとすぐに反論をすることが身に付いている。即興性という点においてはまだコントロールされた状態ではあるものの、基本的な「やりとり」ができる生徒たちの力をさらに高めることを目的として実践を行い、「やりとり」する力を育てるために有効な要素を検討する。

①仲間による「やりとり」の観察

机の配置を図 10 のようにして、表4の学習活動を行った。

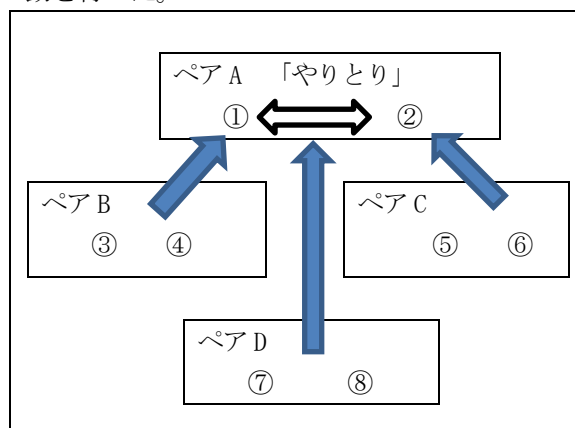


図10. 3ペアが「やりとり」を観察する図

表4. 学習活動の内容

1. テーマに対し、賛成および反対意見を考える。
2. ペアAがディベートを90秒間行う。この時、他の3ペアが観察し、メモを取る。(ペアBは賛成の立場をとる生徒①を、ペアCは反対の生徒②を、ペアDは生徒①と②の「やりとり」を観察する。)
3. ディベート終了後に、アドバイスおよび評価点(1回目)を学習プリントに記入する。
4. 仲間からのアドバイスを参考に、より良いディベートを目指して、ペアで次回の作戦を立てる。
5. その次の授業で、同じテーマでディベートを行う。前回と同じ3ペアが再度観察し、アドバイスおよび評価点(2回目)を伝える。
6. ディベート1回目と2回目を比較し、良くなった点や今後の目標をペアで振り返る。

ディベート終了後にアドバイスを記入した学習プリント(表5)を、図10の③の生徒(=生徒③)が、図10の①の生徒(=生徒①)に手渡した。率直な評価に大変興味を持ち、仲間からのアドバイスを食い入るように読んでいた。その姿を見て感じたことは、「中学生にとって仲間からの評価は本物の評価であり、とても気になるものだ。」とい

うことである。メッセージの中には、仲間の頑張りを認めるものや、ディベートの相手の気持ちを代弁するメッセージがあった。それらを読んで嬉しそうな様子や納得している姿が、印象的であった。

表5. 生徒③が生徒①に対して書いたアドバイス

～1回目のアドバイス～	
1. 生徒①が「話し手」のときの様子	○1つ1つの文がわかりやすい・相手の目を見て会話をしている・声大きい点が良い。 ●論理展開が唐突である・日本語を挟んでいる点を工夫しよう。
2. 生徒①が「聞き手」のときの様子	○うなずきがある・「Ah…」と言っている点が良い。 ●うなずくだけでなく、つなぎ言葉を使うと良い。
3. 「10点満点で評価」をするならば、7点。 (●は、「工夫するともっと良くなる点」)	
～2回目のアドバイス～	
1. 生徒①が「話し手」のときの様子	○「Right？」などを使って、相手が主張を理解しているかどうかを判断していた点が良い。 ○単語と単語の間がなくなったところが前回より良くなった。
2. 生徒①が「聞き手」のときの様子	○アイコンタクトがあったことが良い。 ○返答がスムーズで前回より良くなった。
3. 「10点満点で評価」をするならば、10点。	

表6. 生徒による評価結果

1. ペアBとCによる評価【ペアAを「話し手」「聞き手」の立場で評価したもの】 (※10点満点中)	
1回目の平均点：	7.56点
2回目の平均点：	8.44点
2. ペアDによる評価【「やりとり」の内容を評価したもの】 (※5点満点中)	
1回目の平均点：	3.64点
2回目の平均点：	4.20点

表7. 90秒間で行った「やりとり」の回数

1回目の平均回数：	2.41往復
2回目の平均回数：	2.76往復

アドバイスを受ける前後の「やりとり」を比較すると、表6からは質の向上、表7からは回数の

増加が伺える。アドバイスにより改善点が明確になり、質と量に変化が見られたと考えられる。

表8. 学習活動後の生徒の感想

◎今回は、ただ自分の意見をならべるだけでなく、しっかりと相手の意見をふまえての反論を意識して、会話することを重視できた。今までとは違い、相づちや質問、会話の流れなどを自然にすることができた。
◎私は今日の2回目の発表で、聞き返しのフレーズ「How about you?」に限らず、「What do you think?」なども入れてより自然に会話ができた。また相手が止まったときに、相手の意見を整理して反復することで会話が広がった。今回は、〇〇さんが行っていた「確認しながら会話をする」とをまねて、「Do you understand?」などの表現を使いながら、相手が自分の意見をわかってくれているのかも意識したい。
◎私はディベートでは自分の考えをよく伝えることができたが、相手に十分に理解してもらえるような易しい表現で話すことができなかったのが課題だった。しかし今回の授業を通して、短い文を多用することにより、わかりやすいディベートを展開できたように感じた。

仲間によるアドバイスが学習者の自己分析の一助となり、学習意欲の向上や課題把握につながっている(表8)。活動前は相手を打ち負かすことに意識が向いており、教室のあちこちから「やったー!勝った!」などの声が聞こえた。相手を言い負かすスキルも重要であるが、相手の主旨を確かめながら論を展開することは、質を深める上で必要なことである。また日常生活においても、相手に合わせて話す速さを調節したり、相手が言い淀んでいるときに助け舟を出したりすることは、スピーキングのスキルとして、また人とコミュニケーションを取る上でのマナーとして重要である。B中学校での実践は、相手意識を持ち会話を続けるという意味において有効な活動となった。

4 考察

(1)「やりとり」する活動を取り入れること

A中学校の実践より、「話すこと」に不慣れな生徒たちであっても、帯活動やスピーキングテストなどで、「やりとり」する場を積極的に取り入れることが重要であると考えられる。

帯活動でペアによる「やりとり」をする際には、できるだけ「Q→A→Q→A」を求める。そこからコ

コミュニケーションが始まるだろう。その学習活動の中で、疑問文を作る練習、話題を広げる練習などを積み上げていきたい。

スピーキングテストの実施は、生徒自身が自分の力を実感する上で非常に有効である。手応えを感じた生徒も、力のなさを実感し後悔した生徒も、どちらも次回への意欲を示した。

またその後のフィードバックも重要である。特にスピーキングテストの場合、その出来を客観的に評価しにくい。そのため良い点、課題点を振り返ることで、次につながる有意義なテストとなる。

(2) 他者との関わりの有効性

B中学校の実践より、「やりとり」する力を高めるためには、共に学ぶ仲間による観察、助言、それを受けての改善を行うことが、以下の点において効果的であると考えられる。

まずメタ認知という観点である。自己評価では把握しきれなかった課題を明らかにし、改善に向け意識することができる点において有効である。

「やりとり」は即興的に、かつ双方向で行われるので、その内容を確認しづらい。話を続けることに精一杯になってしまい、声の大きさや、相手に合わせたスピードを意識することが難しい。仲間からの客観的なアドバイスは、「やりとり」の質と量の向上につながる、主体的・対話的で深い学びとなりうる。

次に自己肯定感を高めるという観点である。自分の話した英語を仲間から認めてもらうことによって自信がつき、さらなる意欲へとつながる。生徒の感想を読むと、仲間から認めてもらえた嬉しさや、アドバイスを励みに頑張りが成長できた喜びが感じられた。

また、このように他者と関わりながら学ぶことは、コミュニケーションの力を高めることにつながるだろう。助言する側は仲間の良さを認め、言葉で適切に伝える力を、助言される側はアドバイスを素直に受け入れ、改善しようと試みる心を育てることにもつながると考えられる。

5 到達点と課題

本研究から、「やりとり」する力を育てるためには、日頃の授業の中で「やりとり」する場面を設定し、その成果をスピーキングテストで測ることの有効性を明らかにした。また、「やりとり」を生徒同士が観察し、助言し合うことによって、「やり

とり」の質を上げ、生徒のコミュニケーションに対する意欲と自信を高めることも明らかにできた。

今後の課題として、指導を継続し生徒の変容を長期的に検証することと、人と関わる力や表現する力を高めるために、英語科だけでなく他教科と連携して3年間を見通したカリキュラムを編成し、実践していくことが挙げられる。

引用文献

- Council of Europe 吉島茂・大橋理枝ほか（訳編）
（2008）『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、朝日出版社。
- 深瀬智子（2017）「生徒のコミュニケーション能力を育成する言語活動の工夫 - 英語の授業における豊かな『やりとり』を目指して -」、『山形大学大学院教育実践研究科年報』、第8号 pp. 262-265.
- 松川禮子・大城賢（編著）（2008）『小学校外国語活動 実践マニュアル』、旺文社。
- 文部科学省（2017）「新学習指導要領（平成29年3月公示）中央教育審議会 初等中等教育分科会 配布資料」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm（最終閲覧日 2018年1月28日）
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年7月公示）」、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf（最終閲覧日 2018年1月28日）
- 佐々木雅子（2011）「第3章スピーキングの習得と指導 1. スピーキングとは何か」、富田かおる・小栗裕子・河内千栄子（編著）、『リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業を目指して』、大修館書店、pp. 148-160.
- サヴィニョン、S. 草野ハベル清子・佐藤一嘉・田中春美（訳）（2009）『コミュニケーション能力 外国語教育の理論と実践（増補新版）』、法政大学出版局。

Teaching Ways to Foster the Students' Interaction Competence in English
Tomoko FUKASE